

二つの正統性と近代

——丸山真男における二つの正統性概念と近代 社会の成立過程におけるピューリタニズム——

大井幸子

この論文は、丸山真男における二つの正統性——教義上の正統性と制度上の正統性——とを分析用具として、西欧近代社会がいかにして成立しえたかを考察することを目的としている。特に近代デモクラシーを生み出す基盤となったピューリタニズムの「神権政治」との関わりに重点をおいている。

まえがき

- 1 二つの正統性
- 2 世界宗教におけるO正統性とL正統性
- 3 神権政治から民主主義への転換
～近代社会とピューリタニズム
- 4 まとめ

まえがき

本稿は、前近代社会からそれとは全く異質な「近代社会」が何故成立しえたのかを追求するための一つの試みである。マックス・ウェーバーは、近代資本制の成立にあたって、「禁欲的プロテスタンティズム」の倫理が果たした役割を論じた。本稿は、このウェーバーの方法を応用して、ニューイングランドに居住したピューリタンが行なった神権政治 Theocracy からそれとは全く異質な近代社会における民主主義 Democracy が発生するダイナミックな過程を説明することをめざすものである。

神権政治 Theocracy と民主主義 Democracy とは、全く正反対のものと考えられている。では何故正反対の神権政治が民主主義を生み出す原動力となったのか。この転換を考察するにあたって、丸山真男の二つの正統性の概念が有効であるので、それを用いることにしよう。

ウェーバーは、正統性の概念を 'Legitimacy' に限って用いている。そこで、ウェーバーの方法に丸山の二つの正統性の概念を加えて議論をすすめることは、有益であると思われる。

1では、丸山真男における二つの正統性についてかんたんに紹介し、2では、ピューリタニズム以外の諸宗教における二つの正統性の関係について論じ、これらの宗教においては何故近代社会を生む原動力とはならないで、ピューリタニズムのみが民主主義を生み出す原動力となりえたかについて論ずる。3では、具体的に17世紀のニューイングランドを舞台として、歴史のダイナミズムの中から、西欧近代の特殊性と普遍性とを論ずるつもりである。また、4では、それまでの議論をふまえて、西欧近代の本質を正確に理解することこそ、今日社会科学の争点となっている「近代化」の問題を解く重要なポイントとなることを論ずる。

1 二つの正統性

日本では、正統性の根拠をめぐる論議が少ない。「正統性」そのものが歴史の中で問われたのは、南北朝と明治維新であり、正統性を理論化したのは唯一安齋学派における「崎門の学」

であった。ことに浅見綱齋は、日本における正統性を皇統一系の君主制におき、徳川幕府を正統でないと位置づけたのであった。

細齋の思想は、日本思想史上特異であるが、今日に至るまでひじょうに大きな影響力をもっていることは確かである。丸山真男は、『閩齋学と閩齋学派』において、崎門の学を、正統性の問題として正面からとりあげている。しかも、「正統」概念を二つの異なったレベルに分けて論じている丸山の学説は、ひじょうに重要であり、示唆に富んでいる。以下丸山の学説を紹介しよう。

二つの正統性とは、次の二つである。その一つは「教義・世界観を中核とするオーソドクシー問題」とする正統性であり、もう一つは、「統治者又は統治体系を主体とする正統論議」に関する正統性である。前者を「O正統性」(Orthodoxy)、後者を「L正統性」(Legitimacy)と呼ぶことにする。(丸山〔1980:619〕) また、O正統性に対立する概念は、Heterodoxyであり、「漢語では、異学・異端・異教・邪教である。」これに対して、L正統性に対立する概念は、「統治者あるいは統治体系の変動にかかわるもの」であり、一義的に異端・異教ではない。(丸山〔1980:620〕)

O正統性とL正統性は互いに浸透しあったり、また無関係に位置したり、古今東西の様々な宗教・政治形体に、いくつかのバリエーションを与えてきた。

例えば、O正統性の根拠をめぐる闘争がL正統性にまで及ぶ場合がある。キリスト教がその典型であり、歴史的にみれば、「O正統性をめぐる教義的対立が……政治的闘争に転化し、あるいは国際的な宗教戦争にまで発展したことは周知のこと」である。(丸山〔1980:620〕) また、これとは逆にL正統性がO正統性よりも

優位にあり、影響を及ぼす場合もある。その典型が「皇帝法王主義」である。さらに、O正統性とL正統性が混然一体となっている場合がある。例えばイスラム教がそうである。「O正統レベルの抗争はL正統レベルのそれと交錯するのは避けられない。……これがイスラム教ともなれば、「政教一致」が教義のなかに組み込まれているから、二つの「正統」の関連と交錯はより高度に現出せずにはやまないであろう。」(丸山〔1980:620-621〕 傍点原著)

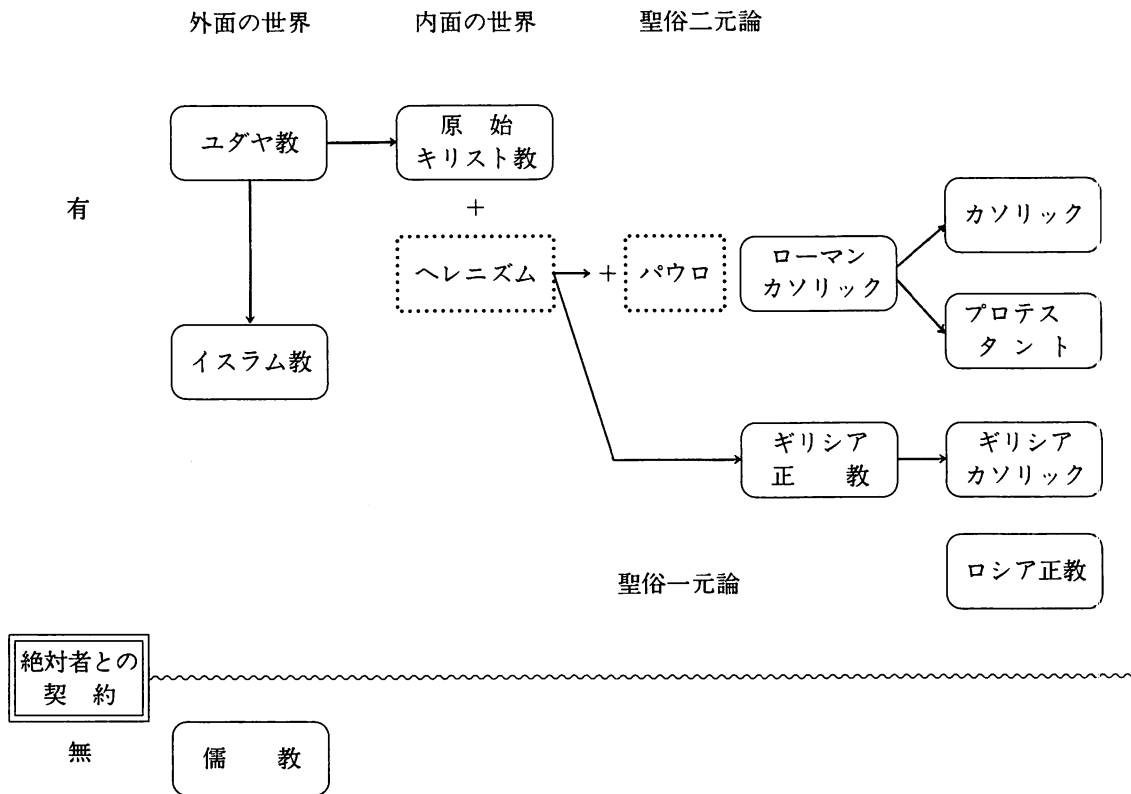
ここでわれわれは、以上述べた丸山の二つの正統性という分析用具を携えて、近代社会成立における特有の正統性の創造を探ることにしよう。近代社会成立にあたり、いわば触媒のごとき役割を果たしたピューリタニズムにおける正統性の創造過程を追求することにする。

が、その前に、次節では、ピューリタニズム以外の諸宗教における二つの正統性の関係を、かんたんにスケッチしておこう。

2 世界宗教におけるO正統性とL正統性

ここでは、ピューリタニズムとの比較で、中世カソリシズム・ギリシア正教・イスラム教・儒教について、O正統性とL正統性との関係を述べておく。O正統性とL正統性の独特の緊張関係は、ピューリタニズム以外の宗教には見られないのである。

担し、ここで扱う諸宗教については、いわば、本質をとり出して論ずることにする。ある一宗教として、長い時代と広い空間とを通して、教義的にも制度的にも様々に変容する過程をぬきに考えられない。だが、ここでは、そうした宗教の歴史の変容のダイナミズムに焦点をさぼるのではなく、静態的な比較を論ずることにする。



(1) 中世カソリシズム (聖俗二元論: $L > 0$)

カソリシズムは、聖俗二元論をふまえつつ制度上の正統性が教義上の正統性よりも優位にある。例えば、西欧封建制下における異端の歴史をふりかえってみよう。

中世キリスト教において、フランシスコ派やカタリ派など教義上いくつかの異端が存在した。こうした異端は、しばしば民衆運動と結びつき、「神の平和運動」にまで発展した。あるいは、商業の復活とともに中世都市における市民の新しい集合意識の中に浸透していった。

しかしながら、教会は、このような異端に権威を根こそぎにされることはなかった。カソリックのヒエラルヒーは、根底からゆさぶられない限りにおいて、局部的な異端は許容したのであった。(そのヒエラルヒーが全面的に問い直されたのが宗教改革である。) こうして、カソリシズムの位階性は、封建制下において、イス

ラムなどの異文化を摂取するチャンネルをもちながら、その制度は今日に至るまで存続しているのである。

ところで、中世カソリシズムにおいて、法王権と皇帝権の対立は、ビザンツの皇帝法王主義という聖俗両世界の権力の一元化と比べて、きわめて異なった現象である。カノッサ事件、及び叙任権問題にみられる皇帝権と法王権の衝突は、きわめて西ヨーロッパ的である。皇帝権の神権性喪失と封建権力の分権化、聖と俗との対立・緊張は、ヨーロッパ史に固有なダイナミズムを生みだしたのである。

(2) ギリシア正教 (聖俗一元論: $L = 0$)

ギリシア正教は、同じキリスト教であるが、他の宗派とはかなり異なっている。それは、トルコ帝国の支配をうけ、イスラム文化圏内に押しこまれた歴史的経験をもったこと、また、ス

ラブ民族が受け入れ、ロシアにおいても国教となったためである。

他の宗派と比較して全く異なる点は、教会が世俗の政治権力と癒着している点（聖俗一元的）と、「イコン美術」がギリシア正教の世界の中心となっている点である。

西欧のキリスト教において、その中心は「聖書」である。「聖書」こそが神の言葉であり、権威である。よって、その解釈の正しさをめぐって論議がひきおこされ、論理的正しさが教義上の正統性の根拠となるのである。

ところが、ギリシア正教では、「イコン」が聖書の中のイメージを提供している。（「イコン」は「イメージ」というギリシア語）イコンを通して、民衆に信仰を、神の権威をよびおこしたのである。だから、ギリシア正教が神秘主義的傾向を強め、その位階性が世俗の制度と峻別されなかったのは当然である。（二つの正統性は混然一体となっている。）

ことにロシアにおいては、ギリシア正教はツァー体制の国策上欠くべからざるものであった。抑圧された農奴の救済のための教会は、世俗統治の目的合理的な要請下であり、その下部組織であった。それゆえ、社会的な自律性を保つことはできず、教会独自の教義上の正しさを弁証する契機すらなかったのである。

(3) イスラム教（聖俗一元的：L>O）

イスラム教は、カソリシズムと異なり聖俗一元的である。キリスト教と同じくユダヤ教から出発しながらも、イスラム教は「神の国」と「地の国」との分離を認めない。世俗世界といっても、それは「聖なるもの」が底の底まで浸透しきった世界であり、終始一貫して神の世界なのである（井筒〔1981:136〕）。この点で、L正統性とO正統性とは表裏一体となっているが、聖

俗両世界の権力が皇帝のみに集中しているギリシア正教の世界とは全く異なっている。

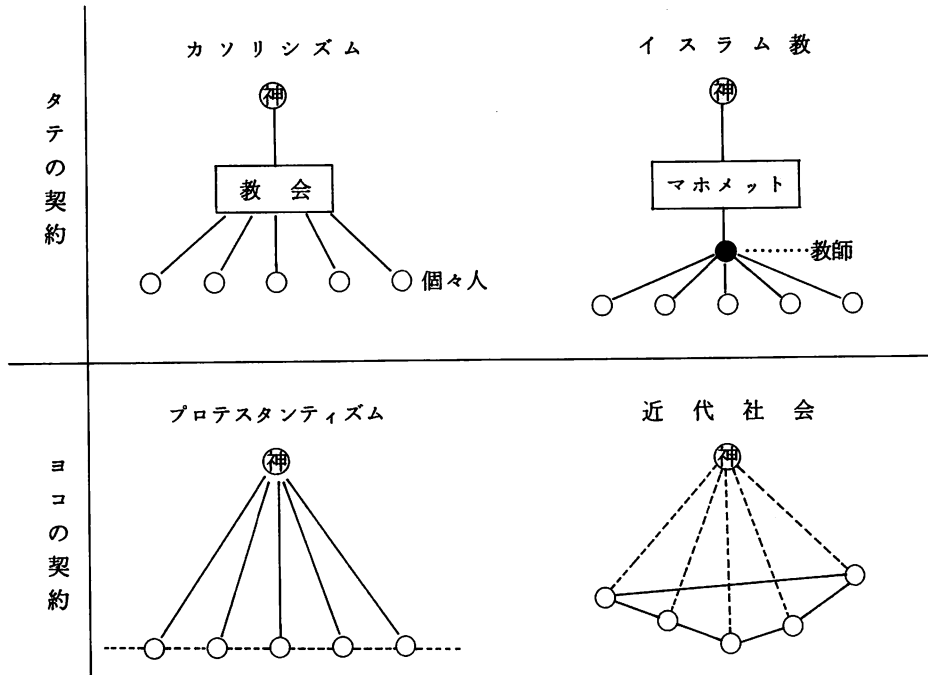
さて、イスラム教は、ユダヤ教とは異なり特定の民族や共同体を超えた、もっと合理的かつ普遍的な宗教である。神の意志に従い、神の面前で結ばれた契約によって、全ての人々は平等となる。が、この契約は、原理的には、神と人間の対一のいわばタテの関係であり、宗教改革を経てプロテスタンティズムが生みだした、神との絶対的距離のもとに人と人とが互いに契約するというヨコの関係ではない。（もっともメディナ期のイスラム教は、ムハンマドの周りにヨコの契約で結ばれた人々の強力な信仰集団をつくりだした。）

イスラム教は、制度上の正統性が根こそぎにされない限りは、教義上の異端も許容していた。この点では中世カソリシズムと似ている。イスラム教徒は「コーラン」以外の聖典をもつ他の「啓典の民」を「被保護者」ジンミーと呼び、共同体の内部構造の一部として容認していた。彼らの地位はイスラム教徒よりも低く、重税を負う（この税金が経済的にはイスラム教徒の財源となった）けれども、体制に影響を与えない限りは、生命と財産は保障された。（井筒〔1981:122〕）

(4) 儒教（聖俗の領界なし：L>O）

そもそも正統性の根拠が問題となったのは、中国の宋の時代であった。宋学のテーマは「実力が正統性を創りうるか」であった。そして、現実に力を持つ者が必ずしも正統性を創造しえないという弁証から、実力を持って現実を制覇する制度上のL正統性と、実力はなくとも論理必然的に正しいO正統性とに二極分解したのであった。この分解は、中国史上、夷狄が優位に立つという不幸な経験によって可能になったのである。

神との契約と組織



中国においては、儒教は世俗の制度の規範原理でもある。教義がそのまま社会の法や倫理となっている点では、ユダヤ教、イスラム教と似ている。しかし、「道教」の存在によって、中国がこの二つの宗教の世界とは全く異質なものであることがわかる。

道教は、儒教という正統派からみれば、「異端」である。⁽⁴⁾ 教義上の正統性がそのまま制度上の正統性と重なり、現実的な権威として権力をもって支配することを「神権政治」とすれば、その正統たる儒教は、異端たる道教を徹底的に排斥したはずである。また、もし儒教が「呪術からの解放」を徹底的に行なったとすれば、「呪術の園」の住人である神秘主義的な道教徒は、中国社会の内部では生き残れなかったはずである。

儒教と道教は、ともに世俗世界における「国家統治」（具体的には大規模な灌漑治水工事）に抵触しない限りは、手を携えて現世に君臨し

た。この正統と異端の奇妙な同居は、中国社会を徹頭徹尾特徴づける呪術的世界像によるのである。《呪術的信仰は中国の統治権力配分の憲法的基礎の一部であったのである。》（Weber〔1922=1974:330〕）

3 神権政治から民主主義への転換 ～近代社会とピューリタニズム

近代社会は何故西ヨーロッパにおいてのみ成立したのか。この重大な問いに対して、ウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、プロテスタンティズムというおよそ資本主義とは異質なものが実は資本主義を生みだすのに必要不可欠なものとして作動したことを分析してみせた。

ここでは、ウェーバーの方法から、ピューリタニズムにおける「神権政治」と近代デモクラ

シーの関係を論じてみたい。両者はおよそ似ても似つかぬものである。だが、全く異質なものから思わざる結果としての転換こそが、歴史のダイナミズムの本質である。われわれは、これまで論じてきた二つの正統性から、この本質に切りこんでみよう。

ピューリタニズムは、魂の救済財を教会という組織アンシュタルトから個々人へと再分配した。聖書を携えた個々人の集会 (congregation) こそが、ピューリタニズムの本質である。

また、ピューリタニズムは、個人が「救いの確かさ」を論理的に納得しうるような体系を現世に作りあげた。これまでの権威の根拠を徹底的に破壊し、新たな正統性の理念を創造し、それを制度として自律化させた点で、ピューリタニズムの神権政治は、歴史上最も成功した革命であった。

では、ピューリタニズムにおける神権政治とは何か。カルヴィンのジュネーブ、ウィンズロップのボストンといった実さいに神権政治が行なわれたケースから、われわれは、聖なる力を世俗の中へ浸透させようとする執拗な試みを知る。注意すべきことは、ピューリタニズムの神権政治においては、初発から聖と俗とは二律背反するものとして峻別してとらえられていたことである。この点で、祭政一致や皇帝法王主義のごとく聖俗一元化された権力構造とは異なっている。

「神の国」をこの世に実現するという唯一の使命のために、聖俗の両権威は、同一の機能要請のために準じねばならなかった。ピューリタニズムの厳格な神権政治は、もともと相入れぬ聖と俗のこの二つの世界に対して、L正統性とO正統性とを一体化させようとしたのである。

こうした神権政治は、のちに近代資本制社会

が順調に発展するためには一度は通り抜けねばならぬ「狭き門」であったと言えよう。もしピューリタニズムにおける契約神学があれほど徹底的に社会の内部に浸透しなかったならば、交換の規範化、契約の絶対性、信用の創造、勤労のエトスといった資本主義の基本的な範疇は創造されえなかったはずである。

さて、具体的に、ニューイングランドを舞台として議論を進めることにしよう。封建的遺存の存在しないニューイングランドでは、ピューリタンの理念はほぼ純粋な形で実践された。1620年にピルグリムファーザーズが、荒野に新天地の拠点を築き、1630年代からはイングランドを迫害されたピューリタンが大挙して移住してきた。この頃から本格的な植民地建設が始まったのである。

(1) ニューイングランドにおける教義上の正統性と異端

ニューイングランドにおける教義上の正統性とは契約神学である。まず、その内容を考えることにしよう。

ピューリタニズムの教義の核心は、「恩恵契約」covenant of graceの観念である。恩恵契約とは、神と人との契約であり、神の意志が人間の良心に直接明瞭に示されることによって（神が一方的に回心をせまることによって）、人間が神への絶対的帰依を、神が人間の魂の救済を、相互に約束することである。

恩恵契約は、あくまでも人間の内面に提示されるものであるから、真の回心者は不可視的な存在である。見えない聖徒によって教会はどのように作られるのだろうか。この課題に対して、イングランドにおける分離派⁽¹⁾は、国教会から離脱することによって可能になると考えた。

ところが、ニューイングランドへ移住してき

た人々は、当初から会衆主義congregationalism⁽²⁾を徹底させた。回心体験を持った人々は、持たない人々とは異なり、可視的なしるしが伴うのだと考えた。このしるしとは、「業の契約」covenant of worksを正しく守ることによって得られる全生活の「聖化」sanctificationである。恩恵契約によって選ばれた者は、「業の契約」を果たす能力を与えられ、神の意志にかなう生活を義務づけられる。このように、ニューイングランドではピューリタンは神との契約関係に入り、契約を守ることによって「救いの確かさ」をはっきりと論理的に納得できるようになった。

こうして、「丘の上の町」City upon a hillには、「目に見える聖徒」visible saintsが集い、「聖書に基づく国家」the Bible Commonwealthを荒野the Wildernessに実現しようとしたのである。

以上のような厳格な誓約共同体にとって、異なる教義をふりかざす者は大敵であったはずである。では異端に対して、正統派はいかに対処したか。以下この点を探ることにしよう。

ニューイングランドにおいて、正統派は異端に対して、まずマサチューセッツ植民地の行政圏内から立ち去るように命じた。1635年には宗教上の寛容を説いたロジャー・ウィリアムズが、1638年には、ハチンソン夫人が追放された。

ハチンソン夫人は、牧師たちが恩恵契約を忘れて道徳的生活を説いているとして批判した。正統派は、彼女が誤った教えを説いたとし、議会の場で教義上の誤謬を指摘し、彼女が誤ちを認めなかったために追放に処した。この他いくつかの追放があったが、基本的に重要な点は、正統と異端とが教義上の論争を経て、平和的に制度上分裂する手続が発見されたことである。

時を同じくして大陸では30年戦争が、イング

ランドではピューリタン革命がおこっていた。それに比べて教義をめぐる権力闘争という点からみれば、ニューイングランドの場合まことに理性的であったと言える。確かに、クエーカーに対する迫害から、ピューリタンの専制寡頭支配の狂信性・偏狭性を指摘することもできる。しかし、被告を召喚し、尋問し、論破し、議会の決定に従って追放するという一連の合理的な手段によって事態を解決に導いた事実は評価しなければならない。ことに一貫した論理を操る理性が、現実の社会機構として効力を発揮したという事実は、決して見過すことができない。

(2) ピューリタニズムのジレンマと正統性優位の確立

1660年以降、マサチューセッツ植民地は、ボストンのような商業都市を中心に経済的に繁栄するようになる。そして、植民地社会は、一方には富の蓄積、他方には宗教的規範の弛緩という現象に対処しなければならなくなった。

この点は、ピューリタニズム自体のジレンマとして重要である。それは特に「半途契約」Half Way Covenantに表われている。以下、植民地社会の世俗化という観点から、「半途契約」について述べてみよう。

あらゆる困難にもめげず荒野を開拓した最初の移民たちに比べて、その子孫たちは自ら選んで移住したのではなく偶然そこに生まれついたのでから、第一世代のような激しい宗教的情熱を体験しえないのは当然であった。

第二・第三世代は、「業の契約」に励むことを自明のこととし、救いを求めてひたすら道徳的生活に励めば励むほどますます回心体験が得られなくなるというジレンマに陥ったのである。植民地社会において、世代交代が進むにつれ、世俗化・道徳的弛緩がみられたのは必然的なこ

とであった。

さて、「半途契約」とは、教会員の子供で回心体験を持たぬ者をどうみなすかという問題に対する苦心の策である。こうした子供たちは恩恵契約に入りうるのか。この答が、再生しなくても教会員資格(但し聖餐を除く)を認めた「半途契約」であった。

半途契約が認められたことは、その後の植民地の歴史を考える上で重要である。ピューリタンのジレンマ——業の契約に励めば励むほど回心できなくなる——が明らかになったからである。そして業の契約の成果として富が手元に蓄積されはじめると、かつての厳格な生活規範は「資本主義の精神」と化し、さらにいっそう経済的繁栄をピューリタンにもたらすという思わざる結果が生じた。半途契約は世俗化に抗したピューリタンの苦肉の策であったが、このためいっそう世俗化がすすむことになったのである。

経済的発展は、それをおし進めるための制度の充実化を可能にした。異端の排斥を通して確立した教義上の正統派は、自らの神義論的正しさに忠実であればあるほど、自ら生み出した制度の自律化と相まって、教義との矛盾に悩むようになったのである。

O正統性とL正統性は、当初の神権政治においては表裏一体となっていたが、経済的発展に伴い、この二つの正統性の担い手は分裂し、両者は緊張関係に位置するようになったのである。

さらに、教義をめぐる紛争の終結は、「宗教上の寛容」、「良心の自由」という市民革命の成果として「市民社会」の基本原則を導いたのである。こうした基盤の上に近代的諸制度が資本主義の順調な発展のもとに整えられていった。

具体的にニューイングランドにおいては、世俗の政府 civil government が、教会組織 ecclesiastic government よりも、世俗に関してはそ

の決定権が優先されることが明示された。また、実さいの政治においても、執政官 Magistrates と教職者 Elders との間で、権限の及ぶ領界をめぐる論争がおこったが、結局は執政官の発言権が拡大した。

さらに重要なことは、植民地で唯一政治参加の資格者であった「フリーマン」freeman が、教会の審査を経ない「非フリーマン」non-freeman と同様、自由な個人としての市民 citizen の様相を呈したことである。この点を詳しく述べよう。

「フリーマン」とは、マサチューセッツ植民地では次のような意味である。教会において自己の回心体験を告白し、教会の資格審査を通った者が、宣誓し、議会での投票権を獲得する。よって、「フリーマン」とは、教会の資格のある者でかつ参政権、土地所有権をもつ者を意味した。ところが、ニューイングランドへの移民が急増すると、必ずしも教会の資格者でなくとも議会の役職に選出される者がでてきたり、経済的に富を持つ者が土地所有者になったりするケースがでてくる。こうした非資格者「非フリーマン」は、富の力を背景に徐々に勢力を拡大し、フリーマンという資格が経済的には支障のない単なる身分にすぎなくなる程まで、政治的にも成長したのであった。

(3) 神権政治から民主主義への転換

以上のように、神権政治においてはO正統性とL正統性は表裏一体となっていた。が、やがてL正統性がO正統性よりも優位に立つ。つまり、O正統性の根拠は個人の内面における神との対決にのみ求められ、個人の外面的な行動はL正統性に基づく社会規範に従うようになったのである。

このように、個人の内面にかかわるO正統性

と外面にのみかかわるL正統性との峻別され、宗教上の寛容の上にL正統性が人々の闘争の標的となって「統治契約」が更新されることこそが近代デモクラシーの基本的な争点となる。

近代デモクラシーの成立にさいして、ピューリタニズムにおける神権政治がその媒介項であった。ピルグリムファーザーズがなした「社会契約」social covenantは、自分たちの救済をまっとうする自由を保障してくれる政治体系を現世に作り出そうとする史上初の試みであった。

そしてウィンスロップ指導下の植民地社会は、これを小さな信仰集団ではなく社会全域にわたって試行したのである。その結果として、ピューリタンが作り出した制度が自律的な運動を展開しはじめ、「社会契約」から「統治契約」への転換が必然的となった。

L正統性は、統治機構としての「市民社会」論において考えられる。個々人は外面的行動の規範を市民政府との統治契約に求める。そこで、いかなる政府を承認すべきかという点に議論が集中する。市民政府の諸議論は、ホブス、ロック、モンテスキュー、ルソーを経て充実し、今日の近代デモクラシーの理論へとたどりついたのである。

さて、神権政治と民主主義の関係をまとめておこう。

ピューリタニズムにおける「神権政治」は、
1. 現世における行動的禁欲、2. 社会一般の規範の成立、3. 契約に対する絶対性、を徹底的に現世でおし進めた。この3点は、L正統性がO正統性よりも優位に立ったときに近代デモクラシーの存在条件となったのである。すなわち、1. 社会における個々人の行動規範の成立、2. 一般法の成立、3. 契約に対するファナティズム、と同型なのである。さらに言えば、この三条件は、近代資本主義が作動する安定条件

でもある。つまり、1. 個人は「経済人」として合理的に行動する、2. 所有権が社会一般に保障される、3. 信用が創造される、という三条件とも同型である。

神権政治と民主主義は、この三条件を軸にいわば反転図形のような関係にある。そしてその転換が可能になったのは、L正統性にのみ政治がかかわるという「制限政府」limited governmentの思想が「統治契約」においてゆるがせないものになったためである。

4 まとめ

これまで、近代社会がいかにして成立しえたかを、ピューリタニズムを媒介として論じてきた。さいごに、近代デモクラシーの本質が、伝統主義からいかに遠いものかという点から見直しておこう。

近代デモクラシーの成立を考えるには、絶対主義までさかのぼる必要がある。絶対主義こそ伝統主義を打破する契機となったのである。

絶対君主は、神が宇宙で全てをなしうるがごとく、その領土内において全てをなしえた。絶対的な権力は国王に集中し、伝統主義的な特権privilegeは、国王の大権prerogativeに吸収されつくした。このように絶対王政において、同質の権力が社会全域に均等にゆきわたったのである。

ところで、絶対君主によって迫害された新教徒は、ヨーロッパ各地に点在していた。その中で、宗教改革の成果を徹底しておし進めたのがピューリタン、ことにニューイングランドへ移住したピューリタンであった。彼らは、絶対的な神に対して信仰をもつ「聖者」として、全生活を組織化する禁欲の倫理を持ち、一人一人がこの世に「神の国」を建設する使命をまっとう

する権力を授かったと考えた。ここに、絶対的権力は、現世内で個々人に分配された。つまり、個々人が絶対的な権力主体として、神の榮譽のために現世に現われたのである。

ピューリタニズムの神権政治は、こうして「社会契約」という人と人との間の契約を可能にした。そして、二つの正統性が個人の内面と外面との規制に峻別され、個人の外面的行動にのみ正統性がかかわるようになるという過程から、絶対王政の特殊 version である「近代デモクラシー」が成立したのである。

絶対王政の成立とピューリタニズムの神権政治は、近代西欧という特定の時代と空間においておこりえたものであり、そこを通過することによってのみ、「近代デモクラシー」及び「近代資本主義」は、まことに「ラクダが針の穴を通りぬけるがごとく」奇跡的に成立しえたのであった。

今日、資本主義の力は圧倒的に強く、全世界——伝統主義が残存する前近代社会まで——をもまきこんでいる。それゆえ、歴史的発展段階の異なった社会が、世界に「いわば横倒しになって同時的に現われている」(大塚〔1969: 208〕)のである。他のあらゆる社会とは全く異質な「近代社会」のみが他を圧倒する状況を、われわれは目の前で見ている。

われわれは、諸々の困難の同時代性ということから、近代の光と影——普遍妥当な価値と非

人間的だと思われるような社会的事実——を分析してゆかねばならない。そして、「近代化」を考える場合、近代資本制社会という制度的普遍主義がピューリタニズムという教義的特殊主義を通してのみ成立しえたという点を忘れてはならない。

<注>

2

- (1) 「神の平和運動」については、堀米〔1976〕、Töpfer〔1957〕を参照のこと。
- (2) 中世都市の市民文化については、Rorig〔1932〕、〔1933〕を参照のこと。
- (3) 堀米〔1976〕を参照のこと。
- (4) 西洋史における「正統」と「異端」は同じチームでも中国史におけるそれとは意味内容が異なるように思われる。

3

- (1) イングランドにおけるピューリタンの中では、国教会の改革を求める右派長老派、国教会からの分離を主張する左派分離派、及びその中間に独立派とに別れていた。
- (2) 会衆主義とは、信仰を同じくする聖徒だけで集会を開く「聖徒の集団」congregationを中心とした派である。ピルグリムファーザーズがこれを実践し、ニューイングランドにおいて支配的であった。

文 献

- 堀米庸三 1976 『ヨーロッパ中世世界の構造』, 岩波書店
井筒俊彦 1979 『イスラーム生誕』, 人文書院
—— 1981 『イスラーム文化—その根底にあるもの—』, 岩波書店
丸山真男 1980 『閩齋学と閩齋学派』, 岩波日本思想体系31に収録
Morgan, E. S. 1944 The Puritan Family: Religion and Domestic Relations in Seventeenth-Cen-

tury New England.

- 大塚久雄 1969 大塚久雄著作集第9巻, 岩波書店
- Rodinson, M. 1966 Islam et Capitalisme 1979 山内昶訳『イスラームと資本主義』, 岩波書店
- Rorig, F. 1932 Die europäische Stadt und die Kultur des Bürgertums im Mittelalter =1978
魚住昌良・小倉欣一訳『中世ヨーロッパ都市と市民文化』, 創文社
- 1933 Mittelalterliche Weltwirtschaft =1969 瀬原義生訳『中世の世界経済 —一つの世界経済時代の繁栄と終末—』, 未来社
- Rosenthal, E. I. J. 1958 Political Thought in Medieval Islam: An Introductory Outline =1971
福島保夫訳『中世イスラームの政治思想』, みすず書房
- Southern, R. W. 1962 Western Views of Islam in the Middle Ages =1980 鈴木利章訳『ヨーロッパとイスラーム世界』, 岩波書店
- 渋谷浩 1973 『ピューリタニズムの革命思想』, キリスト教夜間講座出版部
- 高橋保行 1980 『ギリシア正教』, 講談社学術文庫
- Töpfer, B. 1957 Volk und Kirche zur Zeit der beginnenden Gottesfriedensbewegung in Frankreich =1975 渡辺治雄訳『民衆と教会 —フランスの初期「神の平和」運動の時代における—』, 創文社
- Turner, B. S. 1974 Weber and Islam
- Weber, M. 1904/05 Die protestantische Ethik und >der Geist des Kapitalismus< =1955/
1962 梶山力・大塚久雄訳『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』, 岩波文庫
- 1920 Die protestantische Sekten und der Geist des Kapitalismus =1968 中村貞二
訳「プロテスタントの教派と資本主義の精神」『ウェーバー: 宗教・社会論集』(世界の大思想), 河出書房新社
- 1915/19 Konfuzianismus und Taoismus =1971 木全徳雄訳『儒教と道教』, 創文社
- 1922 Wirtschaft und Gesellschaft, ss.387-513 =1974 世良晃志郎訳『法社会学』創文社

(おおい さちこ)